

シルクロードの旅

『いつかシルクロードに行ってみたいな』と思っていたのが、やっと実現。順序として、当初は西安-蘭州-武威-酒泉-敦煌いわゆる河西回廊を予定していたが、オリンピック直前のカシュガルでの分離独立運動によりウィグル自治区への旅行が一時制限された。その後解除されたが、又同じようなことが起こるかもしれないので、最初にウィグル自治区に行こうという事にした。 ルートはウルムチ→(空路)カシュガル→メルケト→ホータン→ニヤ→(タクラマカン沙漠横断)クチャ→(南疆鉄道)トルファン→ウルムチです。カシュガルからウルムチまでの移動は南疆鉄道の他はすべてマイクロバス(約2000km)だ。

予想はしていたがツアーの参加者は平均年齢 65 歳位、最高齢者は 76 歳だ。私たち夫婦を含めて総勢 15 名、年齢に近いこともあって、楽しい旅ができた。

1 日目（成田-北京-烏魯木齊）（5 月 26 日）

さて。私たちは新型インフルエンザの検疫の厳しい北京経由で空路ウルムチに到着。(23:20)



北京空港の機内検疫



ウルムチ空港

2 日目（天地観光-喀什）（5 月 27 日）

昨晚遅く宿に着いたのに今日は 07:55 観光に出発。ウルムチ北東 90 kmの天地に向かう。途中、要人が通過するということでバスの中で待機、どうも役人とその関係者を先に通過させただけのようで、この国の事情の一端を知ることとなった。さらに行く手を阻むのは羊。この辺りはカザフ族の放牧地で移動する羊の群れによく出会う。



ウルムチ市内（ホテルから）



羊の群れ



カザフ族のパオ

天地は有名な観光地で新疆の観光には欠かせない所だそうで、景勝地というのみでシルクロードとは余り関係なし。
日本の上高地や中禅寺湖のような処。(中国人が怒るかな?)(中国では東洋のスイスと言うそうだ)



天 地

ウルムチに戻り午後二道橋バザールに出かける。海から一番遠い都市と言われるここにもK F Cの店があった。



K F Cのお店



金属器のお店

夕景(といっても未だ陽が高い)16:00 新疆ウィグル自治区博物館に到着。ここでは昔NHKシルクロード特集で紹介された楼蘭の美女に会うことが出来た。3800年も前にこの地に西洋系の貴婦人がどうして?・・・ 推定年齢は 40～45 歳という。確かに鼻は高く、目は深く髪はブロンドできっと美女であったであろう。でも以前東京で見た小河美女は白いフェルトの帽子をかぶり、色白でまつ毛がとても長くカールしてとてもおしゃれだったのを思い出した。どちらに軍配が上げるとすれば、やはり小河美女だ。 乾燥した気候のおかげで出来たミイラで、内臓もそのままだそうだ。館内は写真撮影が禁止で、ちょっと残念。



新疆ウィグル自治区博物館



小河美女 (web資料)



小河美女(長いまつ毛)

中国南方航空 CZ6801 便でカシュガルに出発。(カシュガル 22:20 着)
夜遅いにもかかわらず、ウィグル族の人たちが民族衣装で私たちを歓迎してくれた。



CZ6801 便



カシュガル空港



ウィグル族歓迎の踊り

3 日目（喀什—パミール高原カラクリ湖）（5 月 28 日）

カシュガル地元ガイドのアプリミティさん（ウィグル族）がバスに乗って、パミール高原パキスタン国境のカラクリ湖へ出発。実はこのアプリミティさん、国費で日本に留学したことある日本通、カシュガル師範大学で物理を教える先生でした。大学の先生がどうしてガイドをしているのかちょっと疑問。このアプリミティさんいつもニコニコしていて楽しい人である。揺れるバスの中でツアー仲間とウィグル自治区での独立運動について話していたら、誰かが『今は政府の圧力で抑えられているんだよ』と話していた。3 年後に教育は小学校からすべて中国語になるとも言っていた。ウィグル語とウィグル文字はどうなってしまうのだろう？ これは他の少数民族自治区も同様らしい。これは戦前日本が台湾や朝鮮半島で日本語教育をしたのと同じではないか？ そんな疑問が頭をよぎった。左手にゲイズ川、右手はパミール高原の始まり、しばらく行くと検問所、検問所の撮影は禁止となっている。ここでバスを降り各々旅券を提示。無事通過。もうこの辺りポプラ並木の無く荒涼とした感じ。



アプリミティさん



山の向こうはパキスタン



カラコルムハイウェイ

ずっと昔のシルクロード、商隊が休養をした**キャラバンサライ**(宿泊所)を左に見てしばらく行くと、海拔 3100m の布崙湖に到着。まるで塩湖のような白っぽい湖。



キャラバンサライ跡



布崙湖

14：00 カラクリ湖到着。海拔 3600m、富士山と同じ位の標高だからきっと空気も薄いに違いない。以前チベットでは高山病に掛かり酷い目にあったが、今回はあらかじめ予防薬（ダイアモックス）を服用していたので頭痛も起こらず快適に過ごせた。湖畔のレストランで遅い昼食をとる。少し風があり砂が飛んで山がかすんで見える。コングール山 7719m が湖後方。湖畔を散策、ここから**パキスタン国境まであと 300 km 足らず**、随分遠くまでやってきたなー・・・・・・・・



カラクリ湖



ツアー全員の集合写真



愛くるしいウィグル族の子供

18：45 ホテル帰着 今日 10 時間もバスに揺られてクタクタ・・・・・・・・
夕食は清真料理（豚肉の入っていないイスラム教徒の料理）これなかなか馴染めない。
インターネットの環境が有るかフロントに尋ねると、ビジネスセンターに行けとのこと、さっそく写真の入ったメモリーを持参して訪ねた。ビジネスセンターとは名ばかりでデスクトップPCが 3 台置いてあるのみ。日本にメールで写真を送るべく PC1 台拝借する。ここで事件、**USBメモリーを差し込んだらアット云う間にワーム系のウィルスに感染**。画像が見えなくなってしまった。（ウィルス感染は日本に帰ってから判明）**トホホ・・・・**西域のインターネット事情を垣間見た。

4 日目（喀什市内あちこち）（5 月 29 日）

昨日まで結構ハードな行程をこなして来たので、今日のホテル出発はゆっくり 9:300 予定。朝食後辺りを散歩。
今日は市内あちこちのんびり出来そうだ。最初の目的地はアバク・ホジャ墓（香妃墓）、途中**シルクロードの十字路**で記念撮影、写真の左奥はパキスタンへ、右奥はキルギスへ、左手前はホータンへ、そして右手前はウルムチへと道は続く。つまりタクラマカン沙漠の天山南路と西域南道がここで合流する。その昔、玄奘三蔵、マルコポーロがこの十字路に立った時はどんなであったのだろう。



カシュガルの朝



朝掃除をする人



シルクロードの十字路

カシュガルを見ずしてウィグル自治区を語るな、と云われるとおり古くからイスラム文化の中心として、そしてシルクロードの十字路として発展した都市で、ここがとても中国だなどと思えない。古代は疏勒とよばれた国の中心であった。この地を訪れた唐の玄奘は疏勒を仏教が盛んな国であると記述している。**中国の最西端の町で、タクラマカン沙漠の最西端のオアシス**である。清朝滅亡後一時東トルキスタン・イスラム共和国が成立したが、最終的には中華人民共和国に侵略され消滅。それ以後この地区では現在でもウィグル人、カザフ人、キルギス人等のトルコ系住民の独立運動は続いている。

アバク・ホジャ墓（香妃墓）にはおよそ 20 分で到着。ここは 17 世紀頃のカシュガルのイスラム教貴族、ホジャ家一族の墓。モザイクタイルの外壁に大きなドーム、立派なイスラム建築だ。なぜ香妃墓と云うのか知らなかったが、ガイドの話では昔「乾隆帝」に見初められた女性（香妃）が北京で自殺した、その女性を 3 年かけてここまで運び葬ったと云う。そんな逸話からそう呼ばれるようになったと言う。現在の礼拝堂は以前はイスラムの神学校でアラビア語とコーランを教えていたという。



礼拝堂（1）



礼拝堂（2）



礼拝堂（3）



香妃墓(内部の撮影は出来ない)



イスラム教徒の墓

続いてカシュガル旧市街に移動。ここはウィグル人が古くから住み着いている古い街である。現在カシュガルは開発が進んで、旧市街に居るウィグル人を移転させ老街（旧市街）をかなりの広さで取り壊している。ホテルのテレビを見てもウィグル語は解らないが、新しいアパートに移り住んだウィグル人の笑顔の映像をしょっちゅう放映している。まあ、中央政府の放送だから仕方ないか・・・老街の中の道は狭く、不便だろうなと思ったりしたが、意外とそうでもないらしい。道の敷石は 2 種類あって、**亀の子敷石道**はメイン道路である。**長方形の敷石道**は行き止まりである。いつからこうなったのかは不明だが、1000 年も前から有る路地が今でも同じように使われているのには驚いた。



老街の道(亀の子敷石)



老街の道(矩形敷石)



開発の進む老街地区



陶器職人の工房



笑顔で働く少年



老街の道(亀の子敷石)



陶器職人の工房で土産に購入した灰皿

午前中最後の訪問地はカシュガル中央アジア国際貿易市場、名前はいかめしいがバザールである。
道路の両側は露店がいっぱい、ここに来れば生活に必要な物全て、食品、雑貨、衣料品、何でも揃う。



道路で絨毯を修理する職人



バザール (1)



バザール (2)



陳列棚の商品

13:30 昼食はホテルの清真レストランでとる。独特の香辛料の入った料理でなかなか馴染めない。

日中は暑いのでホテルで2時間ほど休憩を取ってからエイティガール寺院に行くこととなった。エイティガール寺院は新疆最大のモスクで中国のメッカと呼ばれておりイランのホメイニ師やハタミ大統領も訪れた事があるという。内部は広い庭園風でイスラムの祭日には何万人ものイスラム教徒が訪れるという。この寺院歴史も古く 1422 年に造られ、後に何度も改装されているそうである。礼拝堂の彫刻の美しい柱や天井の飾りなどとても良い。しかしイスラム教は偶像礼拝を禁止しているので内部はいたって簡素だ。イスラム教徒が守らなければならない義務は五つ有るという。①アッラーを信じること ②1日5回の礼拝と金曜礼拝 ③ラマダン(断食月) ④ザカート(寄付) ⑤メッカ巡礼 なかなか大変そうである。写真の壁に架かっている絨毯はホメイニ師が寄贈したもの。



エイティガール寺院前広場のパノラマ(360度)



エイティガール寺の門



礼拝堂



説教する台



天井の装飾

壁に架かった絨毯

中庭でアブさんの説明に耳ダンボ

職人街に入っていく。木工屋、鍛冶屋、銅器細工屋 伝統楽器の工房、その他たくさんの店がずっと連なっている。

職人の父親と一緒に仕事をしている子供たちがたくさんいたが、学校教育はどうなっているのだろうか？

ウィグルの子供たちは人懐っこくとても可愛い。

木工屋で発見した**排尿器**、これ最初パイプかと思って口にくわえるところだった。しかし、これ**ベッド**との組み合わせでよく出来ている。



木工屋



銅器屋と子供たち



父親と仕事をする少年



木工職人の少年と父親



何を売るのか？(客待ちの老人)



お洒落な少女



職人街



赤ちゃん用の排尿器



赤ちゃんのベッド(中央に排尿器用の穴)

今夜の夕食時に思いがけないことが起こった。

旅行社の粋な計らいで、**我が妻の 60+ ?? 回目の誕生日**を皆で祝ってくれた。 過去にも同じような経験はしていたが、旅行の最中なので妻は自分の誕生日をすっかり忘れていたようだ。実は私も同じ・・・(笑)。 ちょっと恥ずかしかったが、大きなケーキと王冠をプレゼントされ沢山の方から祝福を受け、とっても良い記念となった。



大きなケーキと王冠



土産に求めた民族楽器(ミニチュア)

5 日目（喀什-麦盖提）（5 月 30 日）

今日は国道 315 号線をメルケトに向かう。せっかくカシュガルに来たのだから観光ルートに無かった南疆鉄道の終着カシュガル駅に寄ってもらい、記念撮影をする。

駅前広場が広大で野球場が出来そう。 列車の発着時刻でないのか人影もまばら。

現在、カシュガルからホータンまでの鉄道を建設中だそうである。後ほど建設中の鉄道と出会うこととなる。



カシュガル駅(右)(真ん中のバスは我々のマイクロバス)

10：15 中国最西端の仏教遺跡莫爾仏塔に到着。（モール仏塔という）

ガイドの話ではこの仏塔は唐代に建てられ、この仏塔かなり崩れているが、大きな方形土台の上にデンと構えている。近くに人間が立って撮影すると、その大きさが良くわかる。南東側には僧院か寺院の土台が残っていた。いずれも日干し煉瓦造りで原型がほとんど解らないくらい崩壊している。もとよりイスラム教が入ってきた後は仏塔も破壊されただろうし、盗掘で破壊されたこともあったろう。あと何十年かしたら只の土の塊になってしまうかも。遺跡では陶器の破片を拾った。メルケトに向かう途中ウィグル農民のバザールに出会った。**ロバ車で肥料用草を一日がかりでバザールへ**。これバザールで 70 人民元(¥1050)で売れるという。



中国最西端の仏教遺跡



莫爾仏塔



僧院か寺院の跡



ロバ車で肥料用草をバザールへ



延々とバザールに向かうロバ車の列



ウィグル農民のバザール



拾った陶器の破片(1000 年以上前の物)



ウィグル農民のバザール



建設中の鉄道(カシュガル—ホータン)

13:00 岳普湖県(ユープーフー県)のレストランで昼食。シシケバブ、ラグ麺、ポロ(焼き飯)がおいしかった。食後近くをブラブラしてみた。羊をナイフ一つで豪快に捌いていた。じっと見ていたが一頭を捌くのにかかる時間も時間が掛からない。神業である。



羊を捌く



豊富な果物

どこまでも続くポプラ並木を走破、途中**青空WC**(男性も女性も子供の頃を思い出しながら) (笑)

16:10 ホテル麦盖提県迎賓館に到着。このホテルは国営でサービスは最低であった。

休憩後農民画の展覧館に出かける。なかなか面白い絵がたくさん、表現方法もいろいろで芸術的というよりも、素朴で味わいがある生活に密着した絵ばかりだ。絵には値段が付いていておおむね 300~1000 人民元。我々ツアーの中にも買い求めた人がいたようだ。少しは農民の収入になるのだろう。



延々とポプラ並木が



ホテル麦盖提県迎賓館



農民画の展覧館



メルケトの人民広場 (パノラマ)



ドラムカムを踊る

レストランで夕食後センター村の農家を訪問(21:50)、途中村の十字路で農民と交歓。人懐っこい人達ばかり。訪問した農家はガイドさんの友人である中学校の校長先生が手配してくれたようで、ウイグルの人達の盛大な歓迎・もてなしを受け、大曲藝術ドラムカムも十分に堪能できた。後で聞いた話ではウイグルの女性が男性の前で踊ることはほとんど無いそう。この夜はホテルに帰ったのが 23:50 この後ドラムカムは深夜 2:00 頃まで続くという。写真の民族楽器の名手のおじいさんは日本で言えば無形文化財級で日本にも行った事があり、ウイグルを紹介する本や雑誌にはたいてい写真が載っている有名人。



村の十字路で農民と交歓



家路を急ぐロバ車 (1)



家路を急ぐロバ車 (2)



踊る女性



民族楽器の名手と



民族楽器を奏でる



孫を抱いて目を細めるおばあさん



当家のお孫さんと



音楽に合わせて体でリズムを取っている



踊る村民

6 日目（麦盖提-和田）（5 月 31 日）

いよいよタクラマカン沙漠の旅が始まる。ここでカシュガルからずっとお世話になった現地ガイドのアプリミティさんとお別れ。彼は長距離バスの乗ってカシュガルに戻ると言う。8:30 ホテルを出発。途中ポプラ並木が続く撮影ポイントで停車。向こうからやって来たロバ車を撮ったつもりが、よく見ると馬車であった。ここでは珍しい。ヤルカンド市内、ヤルカンド賓館でWC休憩。市内走行中バスが故障したが、小一時間掛かって修理完了。道路はどこに行っても広いので道路端で修理もOKである。修理中浅野さんの指南で太極拳を体験。(笑) きれいなドレスを着た女兒がいたので撮影、この子下着は着けていない。



きれいなポプラ並木



ロバ車ではなく馬車



修理中のバス



太極拳を体験



広い道路



ドレスの女兒

17:30 ホータン、ホテル玉都大酒店に到着。なるほど玉の産地であるから『玉都』か、妙に納得。ホータンではまず最初に吉雅(シジャ) アトラスシルク廠を見学。このシルクの製造工程は2000年以上の歴史があるという。なるほど古代シルクである。ここで織られているかすり、柄は大きいが日本にもありそう。この建物で見た天井ポプラ材の細工は素晴らしかった。もう芸術品である。



糸を紡ぐ



絣を織る



天井の細工

次に訪れたホータン絨毯廠は今日が日曜日であったため、人影もまばらで作業をしていたのは休日出勤していた女性2人だけだった。一人の受け持ちは幅70cm程度で一日作業をして織りあがるのは高さ約10cmだそうである。気の遠くなる作業である。



絨毯を織る(右写真の母親かも)



絨毯廠にいた女兒

夕食後ホテル周辺を散策してみる。夜店の屋台は主に直ぐ食べられるものばかり、お酒は無い。アヒルと鶏の焼き卵(1 人民元でお釣をくれた)を食べてみた。固めの仕上がりで結構おいしかった。21：00 はまだ明るく宵の口でこれから大勢の人たちが子供ずれで繰り出してくるらしい。りんごとぶどうを量り売りで買い求めてホテルに退散。 夜 11：00 にホテルの窓から眺めると、すごい人出、双眼鏡で覗くと子供達はボールをけて遊んでいるし、大人はおしゃべりを楽しんでいる様子だ、一向に静まる気配は無い。これどーなっているのかな？？



人民広場（ホテルの窓から）



ホテル玉都大酒店



夜店



夜店の屋台



ラグ麺と餃子



毛沢東が玉の取引(ジョーク)



夜 11 時の人民広場の様子



ホテルの近くで建設中のビル



人民広場の夜明け

7 日目（和田—尼雅）（6 月 1 日）

9:00 ホータンの現地ガイドのアティケムさん(ウィグル族)が乗り込んでホテルを出発。この人在日暦 6 年の日本通、きれいな日本語を話す。ホータンにも空港があり発着は 1 日 2 回でウルムチと結んでいる。アティケムさんが言うには 15 年前まではウルムチに行くのにカシュガル経由で 3 日掛かったという。40 分ほどでマリクワト古城遺跡に到着。土塁は原型が判らないほど崩れている。ガイドの話では 50 年も前ならばまだ原型を想像できたほどであったという。土塁は子供たちの格好の遊び場で、急激に崩れてしまったらしい。白玉河で一攫千金を夢見て玉探しをする。(笑) 玉の見分け方①透明感②油っぽいツルツル感③乾いても濡れても同じ色④いつもひんやりと冷たいという事らしい。



マリクワト古城遺跡



ゴビにいたトカゲ



羊を追



白玉河(ここで玉探しをする)



遺跡をバックに



白玉河で採取した石（玉ではなかった）



これは購入した玉

12:00 ホータンの大バザール。人も車もロバ車もごちゃ混ぜになってもものすごい雑踏。一回り回って、地元の子供がヨーグルトのカキ氷を美味しそうに食べているのを見て、早速試食、冷たくてとても美味しかった。（これが後ほど大変な事になる） 果物も豊富でとても安い。



交差点で立ち話



バザール（1）



バザール（2）



くだもの屋



焼き団子



羊の肺の料理



ホータンの衣装箱(嫁入り道具)



衣装箱の彫金



黒い桑の実と白い桑の実



売り物の羊を運ぶ



ヨーグルトのカキ氷を食べる少年



杏の実



羊の頭料理(羊の顔が見える)



アティケムさん

14:00 ニヤに向け出発。ピンク色のタマリスクの花が咲く砂漠を一路東へ。途中例によってWCは青空の下で。慣れてしまうととても気持ちが良いと女性たちには評判（笑） 砂漠道路は一部工事中で、砂漠の中を砂塵を上げて走る。 30m前を走る大型トラックの姿が砂塵で見えなくなった。この悪路を 22 kmも続き、体はぐったり。



ニヤに向け出発



タマリスクの花



ニヤ川



ホテルニ雅



ニヤのメイン道路



ホテルの近くで可愛い娘さんと

8 日（尼雅—庫車）（6 月 2 日）

今日はいよいよタクラマカン砂漠を横断。体調がすこぶる不調となった。昨日ホータンのバザールで食べたヨーグルトのカキ氷が原因らしい。腹痛はするし、熱も少しある。朝食はパン一切れに水っぽい牛乳、それとお粥に昨日購入したりんごで済ました。これから 2 日間日本から持参した抗生物質の世話になる。ニヤから沙漠公路の入り口まで約 30 km、沙漠公路が 522 km、それからクチャまでが 140 km しめて 700 km を走破することになる。ヤギの放牧地を右に見てしばらく行くと沙漠公路の入り口である。この沙漠公路は石油開発用の道路で 1995 年に開通、香港の資本が参入しているという。したがって国道ではない。沙漠公路に入って 1 時間、小さなポンプ室(No.93)に着いた。ここでは地下水をくみ上げ、沙漠公路の両側に植えた防砂用の植物（主にタマリスク）に水を供給している。たしか 4 km おきにポンプ室があると聞いた。管理は人の良い夫婦二人が住み込みでやっていた。3 月から 10 月まで働き、11 月から 2 月までは休暇だという。食料は石油会社の車が運んでくるという。居住区は一部屋で、いたって簡素だ。ここで 8 ヶ月も夫婦二人だけの生活は私には想像がつかなかった。沙漠の真ん中で昼食となった。(12:30) 給油所の隣に塔中レストランがあった。レストランとは名ばかりで、長距離トラックの運転手が利用する二だろう。場所が場所だけにメニューはラグ麺しか無いらしい。いずれにしても、自分は体調不良なのでパスして、日本から持参したチューブ入りの栄養食を食べた。沙漠の中に入り込んで記念撮影。砂は焼けていてとても素足で歩くことは出来ない程だ。砂の粒子はとても細かく、砂というよりもパウダーのような感じがした。これが偏西風に乗って黄砂として日本にまで飛んでくるのだ。記念にペットボトル 1 本砂を持ち帰ることにした。さらにもう一度ポンプ室(No21)で休憩(15:25) タリム川を越え北ゲートへ。途中樹齢 1500 年の胡楊の木を見学。クチャのホテルには 20:35 到着。



ヤギの放牧地



沙漠公路の入り口



No.93 ポンプ場



沙漠公路は延々と



給油所で来た道を振り返る



給油所



ラグ麺（粗末な昼食）



樹齢 1600 年の胡楊



砂漠で記念撮影



オーイ



北ゲートで記念撮影



砂漠を疾走する南疆鉄道(貨物列車)



日本に持ち帰った沙漠の砂

9 目（庫車）（6 月 3 日）

昨日がバスの長距離で疲れているので、今日の出発は 10::00 今日の手配はキジル千仏洞・塩水溪谷・クズルガハ烽火台・クズルガハ千仏洞である。クチャ河を渡ってキジル千仏洞へと向かう。途中広い谷間でヤルダン地形に出会い写真撮影をする。風の浸食で柔らかい土が削り取られ固い部分が残って出来た地形がヤルダンである。別名魔鬼城と言う。色々な形が出来、写真のはポタラ宮と呼ばれている。

12:00 キジル千仏洞に到着。千仏洞は写真撮影が禁止されていて、カメラはロッカーに預けなければいけない。この千仏洞は中国で最も早く開かれた石窟寺院で 3 世紀頃から始まって 8 世紀頃まで作られたと言われている。石窟の中はもっぱら持参した懐中電灯が頼りである。主に釈迦の誕生から涅槃までの物語を壁画にしたものや、古代民族の風俗を描いたものが多い。どの窟か忘れたが 5 弦の琵琶を持った飛天が描かれていて、現存する 5 弦琵琶は日本の正倉院にしか無いという。イスラム教が入ってからは内部の破壊が著しく、その後の各国探検隊により多くの壁画が剥ぎ取られてしまったという。日本の大谷探検隊も然りである。壁画の鮮やかな色は青はラピスラズリ、エメラルドグリーンはくじゃく石、そして白は漆喰であると説明を受けた。

窟を移動するのに階段を上り下りが年配者には大変かもしれない。昼食後クズルガハ烽火台に向かう。途中塩水溪谷で写真を撮る。この塩水溪谷、玄奘三蔵やシルクロードを歩いた旅人が通った道だという。



ヤルダン地形(ポタラ宮)



キジル千仏洞前の鳩摩羅什像



塩水溪谷



千仏洞前のきれいなポプラ並木



キジル千仏洞

クズルガハ烽火台 前漢時代のもの。ガイドさんの説明では、長安まで約 3700 kmを 2～3 日で敵の侵入を知らせたという。昼は狼の糞を燃やし黒い煙、夜は焚き木を燃やして連絡したという。このあたり、狼がたくさんいたのだろうか？ 原型は留めていないが、大きさはそれ程変わっていないだろう。長安まで 2～3 kmおきに有ったというから、1500 箇所の有ったことになる。計算すると 1 時間に 60 km以上の速さで情報が伝達されたのだから、当時としては最速だったのかも知れない。



クズルガハ烽火台(13m 高)



別の角度から

今日最後の見学先はクズルガハ千仏洞。塩水溪谷から 600m程度入った所にあり、キジル千仏洞のガイドさんが窟の鍵を持ってこちらも管理しているらしい。何号窟であったか忘れてしまったが、窟に入ると正面に仏像(昔のものではなく新しい)、廻りに須弥山を表現した仏画、奥には寄進した時の権力者の壁画があった。どれもかなり崩れていて、これは将に**クズレガハ**である。ここも写真撮影は出来ない。そして平地に井戸があった。(板の蓋のみでちょっと危険)



クズルガハ千仏洞 (パノラマ)



クズルガハ千仏洞（パノラマ）

10 目（庫車--南疆鉄道--吐魯番へ）（6 月 4 日）

今日の出発はなんと 11:00 出発までゆっくりとスーツケースの整理をしたり、ホテル周辺をウロウロ。

天気は快晴、この時期このような快晴はめったにないそうだ。朝ホテルのフロントで会った日本語がいきなりガイドの袁さんに、日本ではこういう天気を『日本晴れ』・・・と教えてあげたら、バスの中で『皆さん、今日は日本晴れですね』とさっそく話していた。(勉強熱心)

11:30 スバシ故城到着。観光客は我々だけ。空は真っ青で気持ちが良い。スバシとはウイグル語で『水』を意味するそうである。崩壊が著しくかつての面影はない。キジル千仏洞と同時代が最盛期で、亀慈国最大の寺院であったという。僧侶が 5000 人以上いたと説明を受けた。7 世紀玄奘三蔵が滞在して事で有名である。イスラム教が入った 13 世紀以後はきっと廃墟になってしまったのだろう。ここもホータンのマリクワト古城遺跡と同様いずれ土の塊になってしまうのかも。



記念撮影



西寺区城壁跡



東寺区を望む



スバシ故城の東方を望む



添乗員の田村さんと



青空



野生のスイカの花



土産屋

午後ウィグル族の農家(マリヤ家)を訪問。このあたりでは大規模農家なのだろう。ぶどう棚が涼しげでとっても良い。ここの息子さんは大学卒業後通信会社にお勤めだそうで、裕福な家庭である。ウィグルでは子供に高等教育を受けさせるのはとても大変らしい。用意された部屋でナン、ナツメ、干しブドウ、ラグ麺等で昼食。続いて、家人に手ほどきを受けながらラグ麺作りを体験する。(私は難しそうなので見ていた)(笑) 当家の娘さんがとても簡単そうにやって見せたが、日本人がやるとみな途中で切れてしまい、大笑いとなった。

庭ではおばあさんがナン作りをしていた。ウィグル族の主食で田舎の家には必ずと言っていいほどナンを焼く釜があり、2週間～1ヶ月に一度まとめ焼きするらしい。空気が乾燥しているからカビも生えない。釜から出てきたばかりの焼きたてナンとても香ばしく美味しかった。バザールでナンを売っていたので、自宅で焼く家庭が少なくなっているのかもしれない。



涼しげなぶどう棚



井戸



でっかいナン



ラグ麺作りの前に手を洗う



手さばきも良くラグ麺作りをする娘さん



ラグ麺作り体験



ナンを焼く釜



ナンの生地を釜に



元はこんな形

ホテルに 14:40 到着。列車の時刻(23:30)までたっぷり自由時間。希望者のみバスで超子(スーパーマーケット)に出かける。スーパーマーケットでは万引き防止の為バッグ等は入り口でロッカーに預けなければならない。カメラの持ち込みもだめである。店内を撮影すると同業者に陳列の様子などの情報が持ち出されるからということであった。店内を撮影できないのは残念だが、エスカレータで地下に降りて行く。スーパーは入り口と出口が別々で、買い物をして出口近くのレジを通過したあと更に領収書を出口で提示し、パンチで穴を開けてもらわなければ店外に出ることが出来ない。日本だったらまず人権侵害となるところだろう。まあそれはそれとして、バナナ、ぶどう、インスタントコーヒー・角砂糖、コップを購入した。しかし、店員の対応はいたって親切であった。



超子(スーパーマーケット)



超子の前交差点



木陰の歩道



輪タクに乗ってみる

ホテルに戻ると添乗員の田村さんが 18:00 からロビーで囲碁の日中対戦をセットした旨連絡を受けた。スルーガイドの王さん(漢民族)と私に対局することとなった。囲碁は元々中国がご本家なので、きっと強いんだろうな・・・ちょっと困ったが、日の丸を背負って定刻に対局。 ご本家なので王さん白、私が先番で始まった。5～6 目打って王さんの実力が判明した。王さんの長考にはまいったが、日本の 2 勝で終わった。王さんには日本の囲碁の参考本を後日贈る約束をした。夕食は近くのレストランでゆっくり。

トルファンに向けスーツケースはマイクロバスの運転手と一緒に別ルートで運ぶので、1 日分の着替えをザックに入れ夜行列車に乗り込むことになる。我々が寝台車で寝ている間マイクロバスの韓さん(サラ族)は夜通し運転することになる。この韓さんいつもニコニコしてとても感じの良い人。



日中囲碁対局



夕食のレストラン



運転手の韓さん



出発前女性だけで



夜のクチャ駅プラットフォーム



列車に乗り込む

11 目（南疆鉄道--吐魯番）（6 月 5 日）

一夜明けて列車の旅、7:50 食堂車にて朝食。メニューはお粥、饅頭、ゆで落花生、ゆで卵、キャベツ、バナナ、コーヒー。天気はすこぶる良く車窓の眺めは良いが、窓ガラスが汚れているのが残念。雪を頂く天山山脈、大草原にはのんびり草を食むヤク、馬、羊。昔NHKシルクロード特集で見たループトンネル、魚児溝駅に。ここでしばし停車。魚児溝駅は南疆鉄道建設のために出来た駅で、立派な操車場がある。車外に出てみる。昔テレビで見た様子とだいぶ変わって、すっかり整備されていた。

列車はトルファン手前でしばらく停車した。時間調整なのかもしれない。13:30 トルファン駅到着。運転手の韓さんの出迎えを受ける。トルファン市内までおよそ 1 時間、ホテルで昼食後しばらく休憩となる。

17:00 ぶどう農家訪問すべく出発。トルファンはとにかく暑い、日向での私の体感温度はもう 40 度・・・でも湿度が極端に低いせいか日陰に入ると結構涼しいのである。農家では庭先でお茶、干しぶどう、西瓜、ハミ瓜を頂く。干しぶどうのお土産はトルファンが良いと聞いていたので 3k g ほど買い求める。



食堂車



軟臥車(コンパートメント)



天山山脈の一部



ループトンネル



魚児溝駅



売り子



トルファンに着いた



トルファンのプラットフォーム



トルファン駅舎



ぶどう農家で

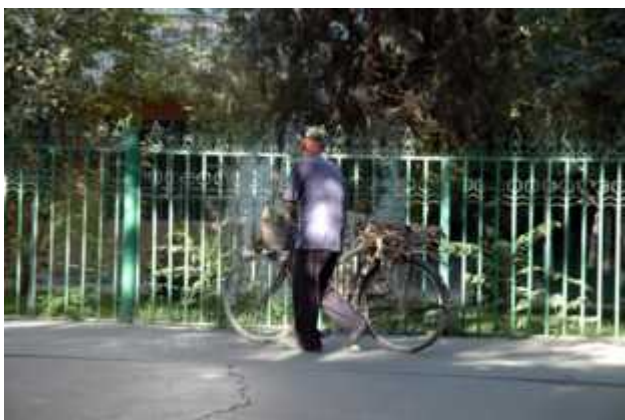


ぶどう農家の老夫婦と

夕食は久しぶりに清真料理ではなく中華料理。ホテルの近くを散歩。



ホテルの近くのぶどう棚のある青年路



自転車の老人



青年路で姉弟



モップで道路を清掃

12 目（吐魯番）（6 月 6 日）

今日からトルファン観光。今日の予定は高昌古城・アスターナ古墳群・ベゼクリク千仏洞・火焰山・蘇公塔。

トルファン市から一路東へ、火焰山を左に見ながら 1 時間で高昌古城に着く。トルファンでは共通の入場券で今日と明日の史跡をすべて見学することが出来る。

高昌古城は玄奘三蔵がインドへ行く途中一ヶ月も滞在したことで有名である。歴史は古く紀元前にさかのぼる。すべてがその時代のものではないにしても、2000 年以上前からのものである。すべて日干しレンガで出来ているので崩壊がひどく、同じような材料で目玉である寺院などはかなり修復されている。世界遺産登録の準備をしているような話であったが、西域の仏教遺跡は千仏洞を除いて日干しレンガ造りが多く、崩壊が著しく原型を留めていないので登録が難しいのでは??? 我々はロバ車に揺られて遺跡奥まで行くことが出来た。とにかく広すぎて全部を見ることは出来ない。玄奘三蔵が説法をしたかもしれない寺院跡、四角い仏塔を見学。見学後、ウィグルの人たちが卓球に興じていたので早速参加、相手は上手でとても低打ちできなかった。



高昌古城



玄奘三蔵が説法をしたかもしれない寺院跡
(修復)



仏塔の向かいに有る遺跡



修復された仏塔



ガイドの説明を聴く



仏塔に描かれた仏像(かすかに見える)



卓球に挑戦

続いてアスターナ古墳群。広さ 10 平方キロで 2000 以上の墓があるという。3 世紀ころから 8 世紀までのものと言われている。

乾燥地帯なので自然とミイラになってしまうらしい。見学できるのは 3 箇所でも撮影禁止。

役人の墓、商人の墓、庶民の墓の順に見学した。商人はこの住人ではなく墓の壁には遠く祖国を想い、東へ飛ぶツバメ、新疆にはいない孔雀やカモメが描かれていた。

アスターナ古墳群には落胆した。



古墳群の碑



墓の入り口



場内に有った男女が絡んだモニュメント

ベゼクリク千仏洞は火焰山の山中にある有名な石窟である。この千仏洞が造られたのは6世紀ごろといわれている。イスラム教が入ってくる10世紀頃までは仏教を信仰していたトルファン王国、貴族の寺院として使われていたという。イスラム化が進むと、寺院は荒廃、砂に埋没。その後ドイツの探検隊によって発見され現在に至るが、この100年間に千仏洞の壁画はあらかじめ外国探検隊により剥ぎ取られて持ち帰られてしまった。したがって洞内の壁画は虫食いのようになっている。またヨーロッパに持ち去られた壁画はその多くが第2次世界大戦によって失われてしまったという。しかし不完全な壁画でもガイドさんの話でその全体を想像できるものもある。

千仏洞の前で民族楽器で日本のメロディを奏でているおじさんがいた。そばに行ったらお前達もやれという。ついにおじさんとコラボレーションする羽目になった。

売店の人たちと仲良しになって記念撮影。



ベゼクリク千仏洞の碑



コラボレーション(1)



コラボレーション(2)



ムルトツク河



売店の人たちと



ポスト

今日最後の見学地は蘇公塔。蘇公塔は、17世紀頃に建てられたミナレットである。墓でもあり、イスラム教のモスクが付属して設けられている。モスクは今でも礼拝に使われている。



蘇公塔



モスク内部

今夜の夕食は名物の羊の丸焼き、ツアーの最年長者(76 歳)が民族衣装を着てナイフを入れた。
夕食後ホテルの中庭でウィグルの民族舞踊を楽しむ。飛び入りで何人かの人が踊りの輪の中に入った。



羊の丸焼き



飛び入り参加の民族舞踊

13 目（吐魯番--烏魯木齊）（6 月 7 日）

いよいよツアーは今日のトルファン観光でお終いとなる。今日は交河故城・カレーズを見学して帰国のためにウルムチへ向かうことになる。
10:00 ホテルを出発。交河故城はトルファン盆地の西の端に位置する。中心街から西に向けて走り出すと、15 分も経たないうちに渋滞に巻き込まれる。トルファンでも渋滞があるのかと、前方を見るとどうも道路の真中で商売が始まっているらしい。小型トラック、ロバ車、オートバイがもうゴチャゴチャである。窓から覗くとなにやら細長い紐のような野菜を売り買いしているらしい。どうも売買はこの野菜だけのようである。ロバ車が窓下に來たのでよく見ると、野菜の正体は細長いインゲンマメであった。60 cmから 70 cmはありそうである。ロバ車を掻き分けやっと通過。交河故城には 10:30 に到着。
パンフレットの写真などで見ると高い台地のうゑに遺跡があり、まるで軍艦のように見えたが、中に入ってみると全体が俯瞰できないので、その形状がさっぱり判らない。ここは城ではなく都市である。ガイドさんの説明を受けなければ原型を留めていない遺跡が僧院なのか、住居なのか、さっぱり判らない。それほど崩壊がすすんでいる。かろうじて高さのあるものは仏塔であったと想像できる。こんな高い台地の上にも井戸があった。覗き込むと水を湛えているのが見える。民家の跡には釜戸のすすがまだ黒く残っているのである。



渋滞の正体



長いインゲン豆



交河故城案内図



見学路



1 階は地下、地上は 2 階



大仏寺跡



大仏寺全景



大仏寺入り口



寺院佛がんが十字の形



十字の形はキリスト教の影響



仏像がかすかに見える



乳児古墳群



井戸を覗き込む



民家群遺跡(居住区)



カレーズ見学地下道



カレーズ

14:45 トルファンを出発。途中風力発電所で写真撮影。ウルムチには 18:00 到着。一休み後レストランで夕食。今夜は豪華にしゃぶしゃぶ。羊の肉も癖もなくとても美味しかった。 就任前少し時間があったのでホテル近くの夜市をブラブラする。明日はいよいよ帰国。



風力発電所



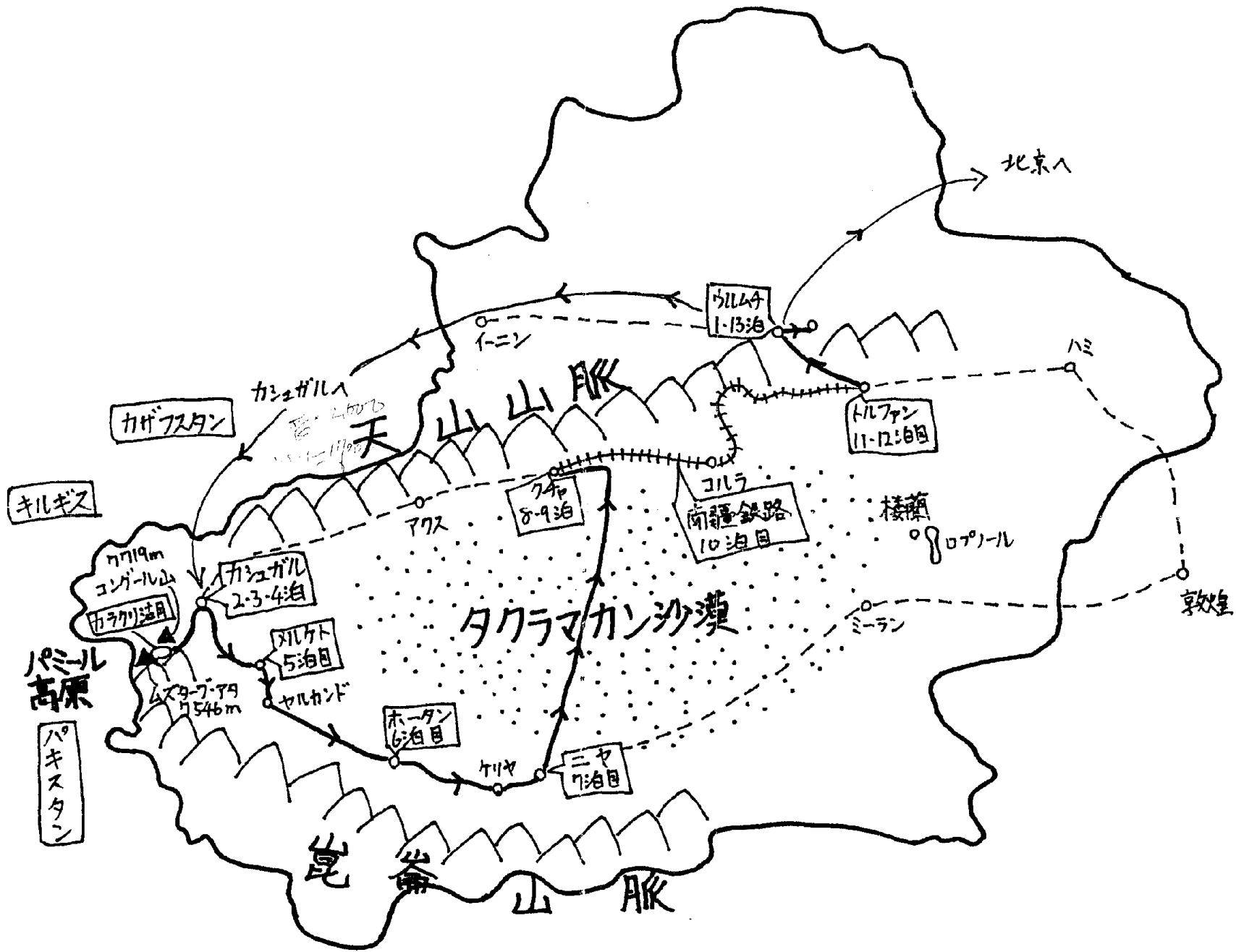
風車



ホテルの近くの夜市



屋台(北海道ブランド?)



14 目（烏魯木齊—北京--成田）（6 月 8 日）

07:40 ウルムチ発 CZ6911 便
 14:50 北京発 JL782 便
 20:15 成田着
 21:30 帰宅